

前回のゾンビランドサガは！

調子に乗るとついつい軽トラに轆かれちゃう癖のある私、源さくらはサドندهス！　って感じで人生二回目の記憶喪失になっちゃったんだけど、数ヶ月かけて育まれたフランシユシユという名の絆は、そう易々と源さくらという天性の才能を見放してはくれなかったんだよね！  
えへへ。

雨にも雷にも雪にも負けず、そういうアイドルに私はなりたい、とか昔の人が言ってたかどうかはわかんないけど、今と昔が合わさって、源さくらは明るく元気に生きています！

まあ、ゾンビなんだけど、ね！

「……ふあい、おはようございましゅ……」

異幸太郎、老ける。

杖を持つ手が、曲がった腰が、そもそも足元がぶるぶる震えている。

白髪が意外と綺麗なんよねえ、さくらは呑気に考えていた。

「ふえ……はふしゅ」

「……は？　なんて？」

サキがすかさず威嚇する。

「ふあ……サキしゃんはこわいのう……」

「ああん？ なめとんのか？」

「こわいのう……こわいのう……」

サングラス越しの目はどこを見ているのか判然としない。老眼で見え辛いならサングラスを外せばよかやん、さくらは訝しんだ。

ふえふえ言いながら、何も書かれていないホワイトボードを杖で指したり手で叩いたり、フランシュシュの面々を幅広い発想で威嚇続けてきた異幸太郎の面影もどこへやら、といった風体である。

すると、冒頭から腕組みをして何やら考え込んでいた愛が、子どもを嗜めるように言う。

「……ていうか、そんな急激に老けるもんなの？ アルピノのライブから、まだ一週間も経ってないのよ？」

「……」

「せやねえ」

幸太郎は沈黙をもってそれに答える。

ゆうぎりはのんびりしている。たえは寝ている。

誰もが事の成り行きを見守っている中、ゾンビたちの視線を一身に集めている幸太郎。であるが、一向に動き出す気配のない彼を不審に思い、さくらが意を決しておそろおそろ声を掛ける。

「……あの〜」

「はいドォー——ン！」

吠える幸太郎。回転するホワイトボード。

上げた手が行き場を失い、ついでに言葉も失うさくら。

件のホワイトボードには『五十年後のフランシユシユについて』と書かれている。

「はい！ すっかり騙されたとお思いでしょうが、そもそも最近のじいちゃんばあちゃんこんな老け込んでません！ もっとハキハキ喋りますー！ はい残念でしたー」

老人メイクのまま軽やかに動き回る本来の幸太郎。ステップが巧みである。

「ムーンウォーク……」

「無駄なテクニクやんなあ」

「無駄なことあるかい。特殊メイク覚えるついでに本場で勉強したんじやい」

「ついでで覚えられるもんなんやろか……」

天才プロデューサー 巽幸太郎様だからな、と凜々しくポーズを決める。プロデューサーとは一体何なのか、嫌でも考えさせられる。

「とかそんなんでもいいんじゃない！ お前らそんなにもたもたしとると佐賀を救う前に佐賀がじいちゃんばあちゃんばつかりになって、歌も聞かんし踊りも見えんしなーんもわからん無駄無駄アイドルっぷりを晒してしまうことになるじやろがい！」



たいやきくんになりたい——

毎日毎日、鉄板の上で焼かれて嫌になった訳ではないけれど、それでもやっぱり、どこかで少し海に飛び込むという行為に憧れていたのかもしれない。

私には絶対に出来ないこと。

私が絶対に望まないこと。

などと思わせぶりな事を言ったところで大した意味もなく、望もうと望むまいと、世界は当たり前前の現実を突きつけてくる。

それは時に優しく、時に残酷に。

私の場合で言えば、その両方が同時にやってきたという事なのだろうか。

海に飛び込んだ。

それはもう盛大に。真っ逆さまに。

墜落する飛行機という、どうしようもないオマケと一緒に。

——不運な事故でした。

などという一言では片付けてほしくない。片付けられたら堪たまらない。未練も後悔も、それこそ死ぬほど残っていた。

全てがここからだった。スポットライトに照らされた花道は、もう目の前に見えていた。少し手を伸ばせば。あと一歩だけでも踏み出す事が出来ていれば。

そんな私の想いは、願いは、鋼鉄の塊と一緒にバラバラになってしまったのだけれど。

そして、それらは海の中へと溶けて消えるはずだった。

実際、いくらかはたいやきくんに食べられたかもしれない。

——でも私は、ここにいます。

ゾンビイだと彼は言った。

血の通わない、本当に全てが自分のモノなのかも怪しい継ぎ接ぎの身体では、その言葉も信じるしかないのだろう。

私はゾンビで、死んでから三〇年以上経っていて、そして今——なんの因果か、またアイドルをやっている。

戸惑いはもちろんあった。三〇年、歴史という観点から見れば「たった三〇年」と言えるその年月で世界が大きく様変わりしたのは、ほとんど屋敷から出ない今の状態でもよく解る。

街並み、走る車、行き交う人々。屋敷の中の家具やレッスン中に使う小道具などでも、初めて見る物が多かった。

何もかもが違う。何もかもが変わっていく。街も、人も、そして——アイドルも。

それでも、最初は受け入れ難かったそれらも、最近はようやく自分の中で整理が出来てきたように思う。

だからだろうか。

不意にそれまで考えていなかった、忘れていた事が、時折頭を過るようになったのは。  
——たいやきくんになりたい。

今となつては叶う事もなくなつた——いや、元々願つていた訳ではないのだから、実現する可能性がゼロになつた、と言う方が正しいかもしれない。

もし海に飛び込んでいたら。あるいはそれよりもっと前、それこそ鉄板の上に乗るような道を選択していなければ。

私は「普通」になれたのだろうか。

普通に学校に行つて、普通に友達と遊んで、普通に誰かを好きになつて、普通に——

✦✦

「……朝？」

チチチ、と聞こえた鳥のさえずりで臆気に覚醒した意識は、続いて聞こえたロメロの獯猛な鳴き声でビクツと跳ねて、何かバタバタと暴れる音で完全に起きてしまった。

「……………」

暫くして静けさを取り戻した部屋の中、身体を起こして探るようにたえの布団を見ると、どうやらまだ寝ているようで、安堵に胸をなで下ろす。





昔々あるところに、とても不幸な女の子がいました。

その子はとてもがんばり屋で、豊かな才能を持っていましたが、とても不幸だったので、何の願いも叶えられず、一つも欲しいものを得られないまま死にました。

夢に挑もうとした矢先、車に轢かれて死にました。

おしまい。

——ふざけるな。

★

ふざけるな、と叫んだら、殴り飛ばされ、蹴り出されて、斎場の外に転がった。

外は曇天の嵐だった。全身の熱を奪う春の雨。咲いた桜を夢と散らせる強い風。

構うものか。

もう、彼女にはどんな熱が宿ることもない。

もう、彼女にはどんな華が咲くこともない。

だから繰り返す。もう一度、何度だって繰り返す。

これが。

こんな終わりかたが、源さくらのゴールだといふのか。

ふざけるな。

そんなのは、あんまりじゃないか、神様。

「何もふざけちゃいねえだろ」

背後からの声に、反射的に振り向く。

果たして。

そこにいたのは、神だった。

——いや。

古臭い【神】のイメージを絵に描いたような、白髭の老翁が傘を差して立っていた。

「こんなのはあんまりだ、そんな面をしてやがる。馬鹿馬鹿しい。一ついいことを教えてやるよ、坊主」

打ちひしがれている僕を、老翁はゾツとするほど冷酷な、その身の温度も血液も何処かに捨ててきたような眼で見下ろしている。

そして彼は、情熱を愛着もとうに失せた、廃れ尽くしたヒット・ナンバーの歌詞を読み上げるように言う。

「人が死ぬのに意味なんざ無い。神とやらが何かの用事で、つまみ上げたわけでもない。この

世に不幸があるとしたら、それはただ、そいつが持つてなかつただけだろう。」  
腕っ節には、自信が無い。

生まれてこの方、能動的に動いたと胸を張れるような決断とも無縁だった。

それが今までの僕で、つまり、今さよならをした自分。

喉から迸った咆哮は獣のようで、見様見真似で振りかぶった拳には、十七年間の人生で初めての敵意を籠めた。

不器用で、不慣れな僕のことだから。

加減も調子もわからずに、それは殺意と呼ぶべきものだったかもしれない。

「餓鬼が」

とはいえ。

初めて抱いた殺意なんて、初めて使う道具に等しい。

頭に血が上り、冷静さを欠き、まともな思考さえままならない僕が何を出来るだろう。

こてんぱんにあしらわれた。

一撃すら届かなかつた。

老爺の動きは熟練している。直線的な突進では一切捉えられず、相手は傘を差しているというのに、服の裾が雨粒に濡れることすらない。何より老爺は外見から推測出来る年齢が嘘のように拳動が若く、指先が掠めることすら夢のまた夢、すれ違うたびに拳を受け肘を受け膝を受